2023 年度

慶應義塾大学体育研究所

基盤研究報告書

慶應義塾大学体育研究所

2023 年度慶應義塾大学体育研究所・公社）全国大学体育連合関東支部
共催ワークショップ
「ルーブリック活用のためのワークショップ＆ディスカッション」

実施報告

～はじめに～

2023 年 12 月 2 日(土)14：00-18：00、慶應義塾大学日吉キャンパススポーツ棟および Zoom Meeting を利用したハイブリッド形式で、標記ワークショップならびにパネルディスカッションを開催した。参加者は現地参加 15 名、オンライン参加 19 名であった。

本シンポジウムの趣旨を以下に示す。

趣旨

慶應義塾大学体育研究所と公社）全国大学体育連合関東支部は、大学体育および大学教育に関する今日的課題を議論する場として共催シンポジウムを開催してきている。昨年度は、「ルーブリックの活用から体育実技の目的と評価を考える」と題し、大学体育実におけるルーブリックの意義と活用事例について議論を行った。その結果、ルーブリックの活用はまだ少なく、その充実に向けて更なる検討を重ねる必要性が示された。また、ルーブリックの活用を含む授業の再構築に取り組むことが重要であり、教員の能力開発・資質向上に帰するものと考えられた。そこで、本年度は、ルーブリック作成のワークショップを企画し、その実践を経て、今後のルーブリックの活用と発展についてパネルディスカッションを行うこととした。また、本ワークショップは慶應義塾大学教養研究センターの支援を受け開催した。そこで、ディスカッションでは実験実習系の授業の事例として化学実験を担当する久保田真理氏をお招きし、大学としての成績評価の在り方、ルーブリックの活用という視点も加え議論を行うこととした。

～プログラム～

第一部　ワークショップ　14:10-16:00

「実技・実習系授業のルーブリック作成の実際」　14:10-16:00

講師　佐藤　豊（桐蔭横浜大学スポーツ科学部）

第二部　パネルディスカッション　16:10-18:00

「ルーブリックを活用した実技・実習系授業の充実を考える」

パネラー（話題提供）

佐藤　豊（桐蔭横浜大学スポーツ科学部）	高等教育における学修評価のあり方
永田直也（慶應義塾大学体育研究所）	授業実践例・教員アンケート報告
金田晃一（千葉工業大学先進工学部）	成績評価の実際についての話題提供
久保田真理（慶應義塾大学医学部）	自然科学系分野におけるルーブリック実践例

司会進行　村山光義（慶應義塾大学体育研究所）

発表内容（ルーブリック作成のレクチャー、パネリストの報告）はアーカイブ映像を参照ください。

https://drive.google.com/drive/folders/1KOD7LABsd1gTC6-LNgYMw2ZzNbBkObKW?usp=sharing

～ワークショップの内容と総括～

本年度は佐藤豊先生（桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部）をお招きし、ルーブリック作成のワークショップを行った。

まず、佐藤先生のレクチャーでは、中・高等学校の指導要領作成に携わっている立場から、義務教育における授業内容や評価方法等についての知見をご紹介いただいた。大学の授業は小・中・高の先にあるため、義務教育の流れを把握し、大学ではどのような授業を展開していくのかを考える必要性があることや、大学ではディプロマポリシーに沿った人間像の構築に伴い、目的があって科目の一つとして体育が設置されていることから、体育としてどんな力を育ませたいのかを考えて授業内容を立てることが、大学では特に重要であることもお話された。

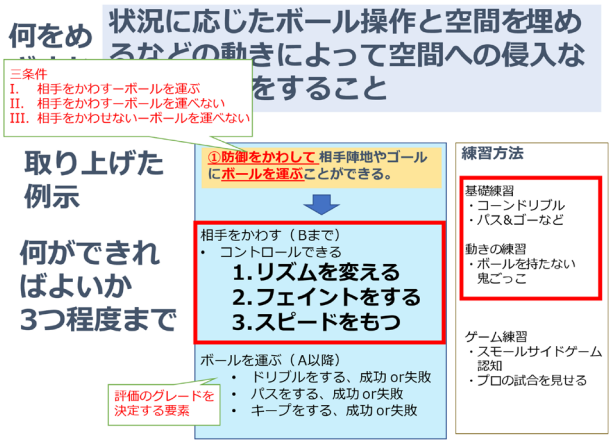
今回のワークショップでは、学習指導要領に記載されている高校入学年次以降(2、3 年生)のゴール型＜技能＞を題材にして、「ボール操作」と「ボールを持たないときの動き」の 2 つのカテゴリーから一つの例示を選択し、授業の中で獲得させたい技能目標を 3 つ立てた。その上で評価基準を設け、ルーブリックシートを作成した。現地で参加している方と、オンラインで参加している方でグループに分かれてディスカッションをしながら進行し、最後に各グループの代表者が発表を行った。事例として、以下一つのグループ発表の資料を提示した。

次から一つ選んで検討します。

高校2.3 ゴール型＜技能＞

ボール操作
①防御をかわして相手陣地やゴールにボールを運ぶことができる。
②味方が作り出した空間にパスを送ることができる。
③空いた空間に向かってボールをコントロールして運ぶことができる。
④陣形を整えるためにボールを他の空間へ動かすことができる。
⑤自陣から相手陣地の侵入しやすい場所に移動することができる。

ボールを持たないときの動き
⑥シュートやトライをしたり、パスを受けたりするために味方が作り出した空間に移動することができる。
⑦侵入する空間を作り出すために、チームの作戦に応じた移動や動きをすることができる。
⑧チームの作戦に応じた守備位置に移動し、相手のボールを奪うための動きをすることができる。



ルーブリック検討シート

校種	領域	例示(概ね満足に該当する)
連動課題のキーワード：かわすことができるドリブル、状況判断		

状況	判断の目安	具体的な事例のイメージ	条件や手立て
特に優れている	かわせて、最善の判断で、次に繋がったかどうか	得点に繋がる、積極的な運び	
十分満足(A)	かわせて、次に繋がったかどうか	ゴールに絡まないけど、取られない、消極的な運び	プロの試合を見せる
概ね満足(B)	かわせて、何かチャレンジしたか	かわせたが、適当な行動になってしまった	成功パターンを作り出すスモールゲームを繰り返す
手立てを要する(C)	かわせなかった	かわせなかった	クローズドなボールコントロール（コーンドリブルなど） ボール持たない上で動く
特に必要	かわすことをチャレンジできない	ボールを受けてもチャレンジせずに立っていたり、ボールをロングに蹴ってしまう	

ルーブリック作成時の留意点

- 次の段階の様相(2年ごと解説例示)をAと設定しない
- 技能は、再現性、出来栄えなどBがどのように表出すればAなのかを共有してみる
- 具体的な児童生徒の姿は、いくつかの視点が考えられる(多様)

・概ね満足の姿は、広くとらえる・・ぎりぎりBからAに少し届かない状況まで

・まず3段階で検討、可能なら5段階

各グループでのディスカッションでは、一つの例示に対してどんな運動技能を獲得できればよいか、そのためにどのような練習方法を組み立て指導するかなど深堀していく様子がみられた。最終的には 3 段階または 5 段階評価でルーブリックを作成し、評価に伴う判断目安、具体的な事例のイメージ、条件や手立てについても話し合った。専門種目が異なる教員同士で進めたが、個々の知識や意見を活発に出し合い、有意義なディスカッションであった。

ワークショップを通して、例示に対する方法論から何を学ばせたいのかという目的を明確にすることで基準や到達度がみえ、実際のルーブリックではどういった観点で評価基準を設けていくのかという視点を広げる貴重な機会となった。

～パネルディスカッションの内容～

ワークショップに続き、パネルディスカッションとして 4 人のパネリストから、大学におけるルーブリック活用の推進に向けた話題提供をいただいた。提供いただいた内容が豊富かつ充実していたため、予定時間を超えて報告をお願いした。そのため、議論の時間は十分にとれなかったが、貴重な意見交換となった。以下にその要点と総括をまとめた。

パネリストによる話題提供

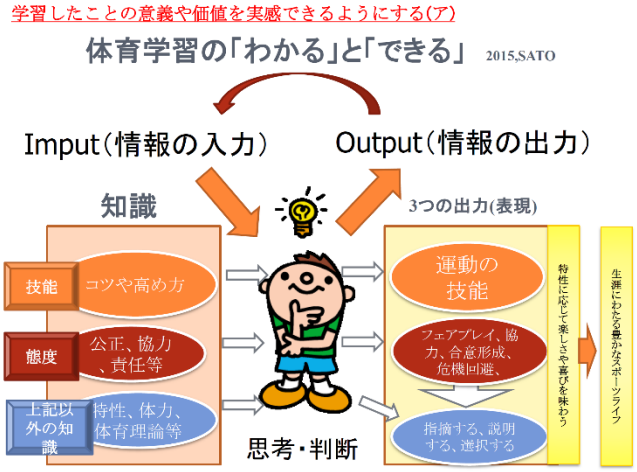
１．高等教育における学修評価のあり方　佐藤　豊（桐蔭横浜大学スポーツ科学部）

佐藤氏からは、ルーブリック作成におけるポイントについてワークショップを振り返りつつ、学修評価における留意点や大学体育の在り方について資料の提示から解説が加えられた。

昨今の評価においては、まず「何を教えるか」を決め、それに対する指導を経て到達度を評価することが重要であるとされ、「本当にそれを教えたか」を考える必要がある、とのことであった。小中高等学校では学年ごとの重点目標（カリキュラムマップのような構成）を整理し、何を教えるかを考えた上でルーブリックが作成されている。その事例として中学校の学年別指導内容、器械運動のマット運動、体育学習の「わかる」と「できる」、などについて説明がなされた。

マット運動の「接転技群：マット上での回転運動」における評価規準は「滑らかさ」「順次接触」「回転力」が基本的運動課題となり、その3段階評価についてその概要を示す「判断の目安」を作成し、さらに実践時に現れる特徴的な動きを「具体例」として示し、判断の助けにしている。この際、おおむね満足というB評価については、「体を丸めて回転している」「ぎこちないが回転している」

「不安定でも技の終末姿勢がとれる」といった、動きの一部をとらえて観点としている。これは、個人の体形や身体のやわらかさなどによる影響も考慮し、指導と学びの努力をあきらめず、達成のために取り組むための設計となっている。そして、その指導のためには、まず、学ぶべき（指導する）内容に関する「知識」を与え、この授業の15回で学ぶ（評価する）ことを具体的に説明し、学修者にオープンにする必要がある。こうした指導をせずに、単に「協力していないからC評価」とするのは、普段の個人の素養を評価することになってしまう。こうした学習者へ入力（Input）する知識として、「技能：コツや高め方」「態度：校正・協力・責任等」「その他の知識：運動や種目の特性・体力の向上・体育理論等の理解」があり、学習者はこの知識を元に「思考・判断」をして、運動や行動等を出力（「表現」：Output）する。「技能」においては、できたかどうか、「態度」については、ある所作を取る・取ろうとしたか、「その他」については、何を考えたか（理解したか）についてペーパーテストや内省をとり、評価が行われる。このプロセスの基準・助けとなるのがルーブリックであり、学修したことの意義や価値を実感できるようになる、とのことであった。



大学体育の在り方については、不要論に対して、学習内容を示し、学びがある（から意義がある）ということを伝えていかねばならず、成果を重ね、魅力的で学びたい科目になっていく必要がある、ことを指摘された。仮に他の科目に比べ単位が取りやすい、という評価になれば残念なことである。体育は、単にできる・できないという身体的技能だけではなく、社会で生きていくための思考力・判断力・表現力を養える、大規模授業とは違ってコミュニケーションスキルや他者への配慮などが実技を通して身につく、といったことが期待される。この意味で、大学体育は「技能」だけ追いかけていいのか、ということを考え、何を重点に15回を構成し教えるかが重要である。佐藤氏の大学での実践では、ジグソー学習・責任学習を取り入れ、学習者同士が学びあうイメージを共有している。さらに、ルーブリックでいえばC評価となるような「動けない」学習者に対する「手立て」が重要と考えている。体育は「動けない」「できない」ことが晒されてしまう残酷な教科であり、できない者はミスをしないために「動かない」「隠れる・逃げる」という悪効果ができてしまっている。この点を大学で解消し、生涯スポーツにつなげることが期待される。失敗しても動くことでその運動・スポーツの特性を味わえ、チャレンジすることが大事である、と思える授業を小中高等学校と大学共に実践する必要がある、とのことであった。

まとめとして、ルーブリックの作成・活用に際し、C評価レベルの学習者に対する「手立て」を具体的に講じていくこと、技能以外のルーブリックをさらに知識、思考・判断・表現等、学びに向かう力・人間性等と順に作成して「どこに向うか」までを考えた指導を行うことが重要であることが述べられた。さらに大学では、社会に求められる資質に関し、「非認知能力」などの獲得についても取り組む必要があり、幸いに体育においては「フェアに取り組む」「マナーを守る」「協同的・共生的に取り組む」など点で授業内容や評価観点を設定しやすい特徴を生かしていくことがポイントである

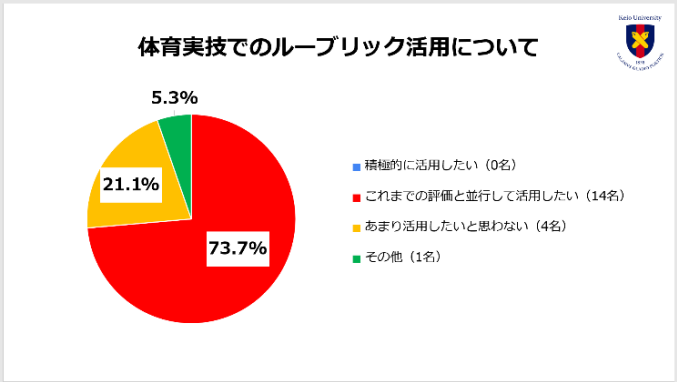
ことも指摘された。

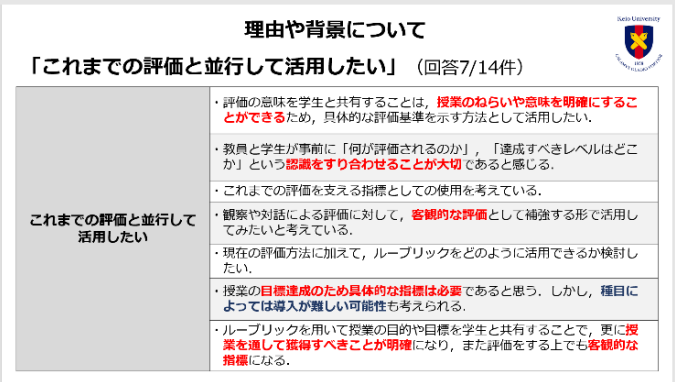
２．大学教養体育授業における成績評価に関する調査報告　永田直也（慶應義塾大学体育研究所）

2022 年 12 月に開催されたシンポジウム「ルーブリックの活用から体育実技の目的と評価を考える」では、大学体育実技授業におけるルーブリック活用について、成績評価のための活用には課題が残ること、その価値や重要性は認識されつつも活用事例の少ないこと、といった課題を見出した。そこで、慶應義塾大学体育研究所基盤研究 3 班では、体育研究所が開講する実技科目における成績評価やルーブリック活用についての実情を調査し、ルーブリックの意義や学修成果との関係性の検討を進めることとした。永田氏からこの調査結果について以下のように報告がなされた。

成績評価については、体育実技担当教員の 10%が疑問や悩みを持っており、「客観的な評価基準の設定」「評価基準と学修成果との関係」「評価基準を学生と共有する手続き」を具体的な疑問・悩みと回答した。評価にあたり参考にしている行為・資料は、「観察（97.5%）」が最も多く、次に「学生との対話（67.5%）」「記録（30%）」と続いた。

ルーブリックについては、体育実技担当教員の 52.5%がその存在を認識しており、73.7%がこれまでの評価と並行して活用したいと答えた。その理由として、「授業のねらいや意味を明確にすることができる」「客観的な評価となる」という回答があった。





一方、21.1%の教員は、ルーブリックの活用に否定的であった。その理由として、「体育に厳格な成績評価はそぐわない」という回答があった。体育研究所以外でも体育実技を担当している教員に他大学の状況を調査したところ、ルーブリック活用の推奨については対応が分かれていることがわかった。推奨している大学では、シラバスにルーブリック記載欄が設けられ、大学や組織主導で成績評価方法を設定している。一方でルーブリックについて特別な指示のない大学では、評価方法を含めた教育活動を個々の教員に任せていると思われる。また、教育場面外でのルーブリックの活用についても調査した。26.3%の教員が教育場面でルーブリックを活用したことがあると回答し、競技スポーツにおける選手選考や指導者表彰において活用しているとのことであった。

これらの調査から、体育研究所が開講する体育実技を担当する教員において、ルーブリックの認知度はおよそ半数程度であったが、具体的な評価基準の設定のために活用を前向きに考える教員が多いことがわかった。しかし、実際の活用には、ルーブリック作成のためのトレーニングが必要なことや、ルーブリックを活用することと学修の成果との関係性が明らかでないことが課題となっていることも明らかとなった。

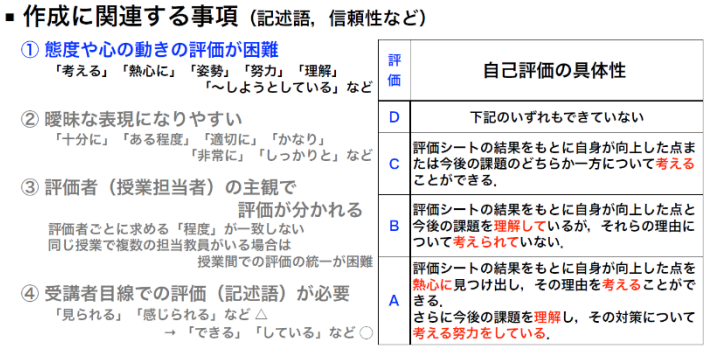
３．成績評価の実際についての話題提供　金田晃一（千葉工業大学先進工学部）

金田氏からは、成績評価の実際についての話題提供があった。千葉工業大学の体育系科目では、ルーブリックの活用はなされていないが、現在の評価方法および、ルーブリックを用いて成績評価を行う場合の課題・問題点などについて具体的な事例とともに紹介いただいた。

千葉工業大学の教養科目の「教養基礎科目」分野の「人間力養成」という分類の中に「スポーツ科学」という授業があり、6 回の実技運動場などでの授業と 7 回の教室での授業講義で構成されている。その目的は、「他者とのグループワークとディスカッションを通じてスポーツの技術面や戦術面などにおける課題を見出し、いかにその課題を解決するかを考え、実践する能力を育成する」ことであり、「課題発見，解決能力の育成」「コミュニケーション能力の育成（表現・伝達能力）」「幅広い視点から物事を考える能力の獲得」の題材としてボッチャ、ブラインドサッカー、バドミントン、サッカー、フライングディスクなどが用いられている。ここで、スポーツ種目はあくまでも題材教材である、という明確なスタンスが強調された。また、成績評価は毎週の提出物（80 点）と期末試験（20 点）で構成され、提出物は、技術や戦術のポイント、ゲームルールの工夫や改善点、人間力に関する授業内での取り組み、に関する各 50 文字程度の記述からなり、期末試験は、人間力に関する授業全体の自己評価と今後の課題の設定、自分自身の専門分野（所属学科）とスポーツの関係、について各 300 文字程度の筆記試験として行われている。さらに、学生は授業の初期と最終時に経済産業省が示している社会人基礎力（3 つの能力と 12 の能力要素）を評価する質問項目に答え、提出するとともに自己評価として確認をしている。

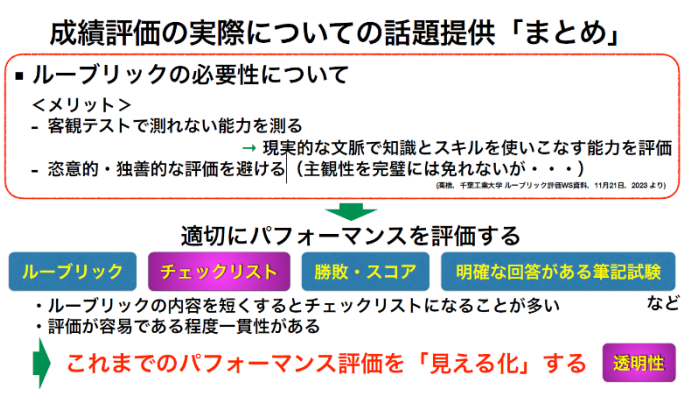
このように、千葉工業大学においては、カリキュラムの中で人間力の育成を目的に定め、評価を一体化させているため、実技能力（技術・体力など）は評価の対象とはしていない。従って、ワークショップで行われたルーブリック作成における技能評価は当てはまっていない。そこで、次に、現在の評価方法を基礎にルーブリックを活用する場合を想定した案と作成上の留意点が述べられた。

まず、期末試験については、記述内容から「自己評価の具体性」「考察の具体性」についてルーブリックを作成し評価が可能と考えられた。ただし、ルーブリックの作成においては、①態度や心の動きの評価が困難（「考える」「努力」「理解」「～しようとしている」など）、②曖昧な表現になりやすい（「十分に」「適切に」「非常に」「しっかりと」など）、③評価者（授業担当者）の主観で評価が分かれる（評価者ごとに求める「程度」が一致しない、複数の担当教員の授業間での評価の統一が困難）、④受講者目線での評価（記述語）が必要（「見られる」「感じられる」などよりも「できる」「している」などがよい）といった問題点が指摘できる。また、評価基準を受講者に開示することで目標を理解し、学習効果の促進が期待できるが、さらに専門知識，関連スキル，用語，フレーズの意味の理解が不足すると効果が限定的となる。こうした点に留意して、例えば、「自己評価の具体性」のＡ評価のルーブリックは「評価シートの結果をもとに自身が向上した点を見つけ出し，その理由を述べることができる．さらに今後の課題を見つけ出し，その対策について述べることができる．」、「考察の具体性」については「専門性とスポーツを関連させ，新規的なアイデアについてその詳細を述べ，さらに得られる効果についても述べることができる．」といった内容が作成された。



一方、毎週の授業の提出物については、「チェックリスト」による評価が提案された。提出内容における、目標とされる項目や活動・行動の有無をチェックするものである。この際、有る・無し、だけが判断され、その程度や詳細は問わない。程度を段階的に捉えるならばルーブリックで評価可能であるが、その際には記述量を増やした長文レポートが必要と考える。また、ルーブリックは⑤ 種目に対する評価者の専門性の問題として、種目に関する知識と「見る目」を養う必要性や、⑥プレー中の適切な評価としてリアルタイムの評価には不向きの部分があり、変化し続ける状況や複数の対

象者の関係性などについて一人の教員が評価できる観点が限られるといった問題がある。その点、ルーブリックの内容を短くするとチェックリストになりやすく、目的とするパフォーマンスによってはチェックリストの方が適している場合もあり、比較的評価が容易で一貫性のある方法になり得ると考えられる。

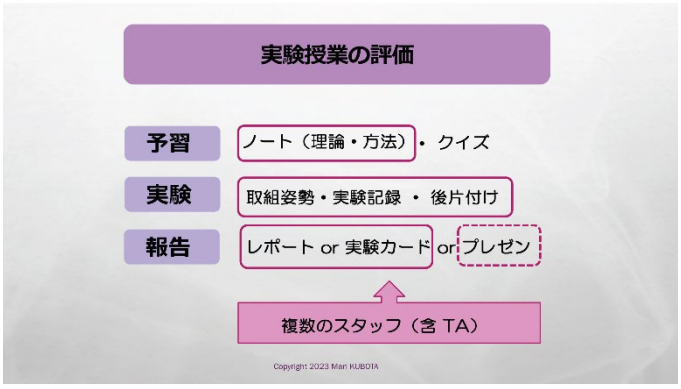


最後に、ルーブリックは実技評価において教員のトレーニングや留意すべき課題もあるが、客観テストで測れない能力を測ることができ、現実的な文脈で知識とスキルを使いこなす能力を評価でき、恣意的・独善的な評価を避けることができるメリットがある。透明性のある評価のために、ルーブリックやチェックリストを目的に合わせて活用することが重要、というまとめがなされた。

4．自然科学系分野におけるルーブリック実践例　久保田真理（慶應義塾大学医学部）

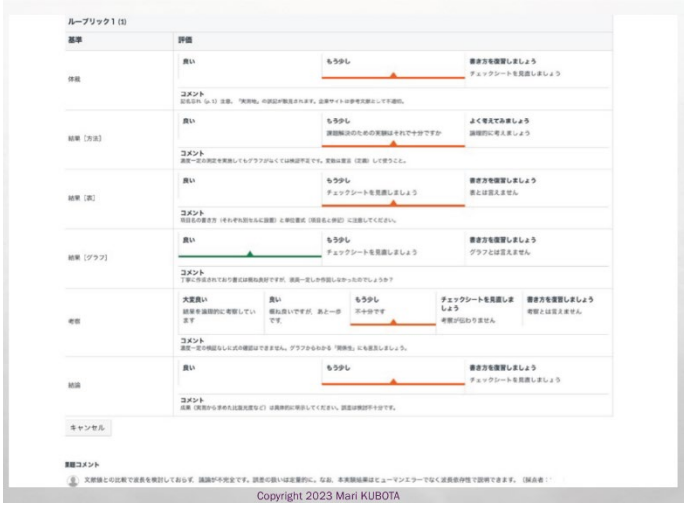
久保田氏からは自然科学分野の化学実験の授業におけるルーブリックの活用事例について紹介をいただいた。まずは、授業のねらいや概要の説明があり、その際の評価の実際とルーブリックに関する説明がなされた。

授業においては「論理的思考」を身につけることが重要で、現状分析、仮説、検証方法、実験・調査、解析・考察、報告というプロセスで科学的に思考することが学問の基礎でもある。また、これは医師として患者を診察し検査・処置をしていくことと全く同じであり、実験の最後にレポート提出をすることは患者に説明をすることにつながる。さらに、実験授業は論理的思考、科学研究の進め方を学ぶことに加え、人に伝える力、実験のマナー、コミュニケーションなどをグループ活動によって養う意義もある。



授業の流れは、授業前の予習、実習、授業中や授業後の報告となる。これらの評価項目として、予習はノート（理論・方法）・クイズ、実験は取組姿勢・実験記録・後片付け、報告はレポート・実験カード・プレゼンテーションがあり、TA を含む複数のスタッフで評価している。そのために評価基準を定め統一性を持たせている。予習に関するクイズは Google Forms を用い、フィードバックも行っている。ノートおよび実習中の取り組み姿勢、実験記録、後片付けについてはチェック項目を細かく準備し、これに基づき複数スタッフが授業中に評価を行っている。例えば、ノートは内容について 2 点を基準に優れたものを 3 点とし、取り組み姿勢も 2 点を基準として非常に良い・普通・もう少しがんばれ・全くだめの 0〜3 点評価としている。その他、「白衣忘れ」や片付けにおける「洗浄不足」「ごみ捨ての忘れ」、実験に際しての安全面に配慮した注意など 20 以上の項目をチェックする。また、身につけることが大切と考え、予習事項や実験記録については，当日に指導を行い、後片付けの評価項目については，次の回に減点項目に関して注意をし、フィードバックを行っている。

報告に関する評価については、慶應義塾大学の学習管理システム（K-LMS）にルーブリック評価があったことから、コロナ禍におけるオンライン授業を機に活用を始め、現在も継続している。ルーブリックは複数のスタッフ間での評価の統一や学生への開示による観点と評価のフィードバックに有効と考えている。報告においては実験ノート・レポートの書き方、論理的な考察の仕方について指導を行った上で取り組ませており、また、動画でも K-LMS に載せて復習できるようにしている。さらに実験ノートとレポートそれぞれにチェックシートを提示し、提出に際して学生が内容を確認できるようにしている。例えばレポート・チェックシートでは、レポートの体裁、表紙、序論、実験、結果、考察の項目で細かなポイントを示している。さらに、各実験について 10 点満点で、体裁、結果、考察、結論を基本に配点を変えてルーブリックを作成し、学生には点数は示さず、各項目（規準）のグレード（基準）評価がわかる形で提示している。評価が低い場合に「書き方を復習しましょう」「チェックシートを見直しましょう」といったコメントも加えている。また、ルーブリックやチェックシートを活用する意識が低いことに対し、翌週に前回の実験カードを強制的に学生同士で添削し合い、また、教員の評価を提示して比較させ、フィードバックすることも行っている。



以上のように、実験による論理的思考力の育成や望ましい取り組み姿勢に向けて、非常に詳細なチェック項目をスタッフ、学生それぞれに示して評価を行い、フィードバック際してルーブリックを用いて総合的に提示する大変システマティックな授業運営体制について報告をいただいた。

～ワークショップ＆ディスカッションの総括～

今回のワークショップ＆ディスカッションは少人数ながら、ルーブリック作成の具体的な手順を学び、またルーブリック活用の実態について各パネラーから大変充実した事例と話題提供を得ることができた。ディスカッションの時間が十分に取れなかったことは企画上の反省点であるが、昨年のシンポジウムから一歩、具体的なアクションを起こし、かつ教学マネジメントとしての授業目標と評価の明確化にむけて貴重な情報交換を行うことができた。

体育実技と異なる化学実験の事例を提供いただいた久保田氏からは、体育で技術面を評価しないことは苦手な学生にとっては嬉しいことかもしれない、また、実際に動きのある授業展開の中で大人数の評価を一人で行うのはとても難しいと感じた、というコメントがあった。これに関連してフロアから、技術面で「できる・できない」を評価する／されるだけではない、人間力への目標や楽しさの体験など、体育実技による学びはほかにもあり、それらも大事にしたいが、評価としては難しい内容になるという意見もあった。そして、技術面のルーブリック作成は大変参考となり勉強になったが、態度や思考・判断などのルーブリックの内容についてさらに検討し理解したいという意見も多かった。また、授業の流れの中でルーブリックの細かな項目をしっかりと把握して多人数を評価することへの教員の努力やトレーニングが必要であるが、これには映像記録などの補助資料が必要といった指摘も得られた。

ルーブリックの活用は細部にわたり評価を深めていくプロセスである。これに対し、チェックリストは比較的簡易で、目標や学ぶべき観点を学生と共有するうえでは有効かもしれない。しかし、ルーブリックの細かな項目の得点の境界、１点の差の理由を定めることも難しさがあり、それを総和して総合評価がなされていくことの説明や学びとしての成果について考える必要がある。今回、化学実験の評価方法について情報を得たように、我々は教員としてこうした教育理論や科学的根拠をさらに学び、適切な評価方法を探求していく必要がある。巻末に事後アンケートの回答をまとめてあるが、ルーブリックを含む評価方法の学びや議論の場を今回で終えず、継続する必要性を指摘する意見も多く寄せられた。佐藤氏からは、初等中等教育の体育の現場におけるこれまでの取り組みを例に、教育の改善には長い時間がかかるが、今回のワークショップに参加いただいたような熱心な教員がそれをリードしていくことになるとコメントがあった。人材育成としての大学体育、身体リテラシーの獲得としての大学体育など、未来に向けて引き続き、大学体育改善していく努力を続けなくてはならない。

～事後アンケートの回答内容～

本プログラム終了後、意見・感想を自由に回答いただくアンケートを実施した。以下にその内容を記載する。

▶ワークショップに参加されたご感想、ご意見、ご要望、何か疑問が残ったことなどがあればご記入ください。

実際にルーブリックを作成して、作り方の勉強になった。チェックボックスとの違いなど、講演でのインプットもとても貴重で、参加してよかったです。小中高での成績評価と大学での成績評価に違いがあるのか、同じ方針で良いのか、そのあたり明瞭になると、ならなくとも違いがあるならどういう点かが分かると、小中高でのルーブリックをどのように大学で導入するかの検討の足掛かりになるのかと感じた。

ルーブリック作成手順について一段ずつ解説を受けながら進めて欲しかった．全体的にルーブリック作成までを投げた感じになっていた．ルーブリックを作成したことがない，中身もよくわからない人が参加者に多いはずなので，作成方法を順を追って説明していただければありがたかった．

・参加人数が少ないのがとても残念だった。
・対面は少ないと予想していたが、オンラインも予想以上に参加者がおらず、これから学生への評価がわかりやすく開示されることが必要となってくると考えていたが、意外に関心がない内容なのかと思った。
・同じテーマを選んでも着目点や落としどころが違って面白いとあらためて思った。

実際にルーブリックを作成してみることで，その難しさもさることながら，発表および共有により，視点の置きどころをどうすればいいのかについて理解が進んだように感じた。ただ，ある程度の正解例みたいなところがどこなのかがまだあまり掴めていないままでワークショップに参加してしまったので，ある程度「この方向で作成していくんです」といった感じで，その方向（事例？）をなぞるような形での，今回の 1 歩手前くらいのワークショップがあればそちらにも参加してみたいと感じた。

お疲れ様でした。この様な機会を創って頂き感謝しております。ルーブリックの作成では観点の確認ができ、とても参考になりました。と同時に、本学の課題が顕在化できる良い機会でした。
様々な先生方の考え方が拝聴でき貴重な機会となりました。ありがとうございました。

参考事例や発表頂いた大学において、S や A 評価の割合規定があるかどうか

実技の成績評価の難しさを再確認できました。本学では専任・非常勤併せて 15 人の教員が実技を担当しています。ルーブリックを活用する成績評価を用いることには、そのことへの理解を求めること、その方法など準備に相当時間を要することを再確認しまた。しかし、今回の研修会の内容は本学でのそれを検討する際の示唆を得ることができました。講師の先生方、研修会をご準備くださった先生方、ありがとうございました。

体育分野での評価やルーブリックについて知ることができ，参考になった．ワークショップを通じて，複数の意見を反映させてルーブリック作りをすることも評価基準を決める上で重要であると感じた．

とても有意義なワークショップとディスカッションでした。自分自身、ルーブリック作成に悩んでいるため、参加者の意見がとても参考になりました。オンライン参加のため始めの説明がくみ取れず、戸惑いましたが、グループの方が優秀で好意的だったため進めることができたと思います。ありがとうございました。

ワークショップ、お世話になりました。実際にルーブリックをつくって使用していますが、ほぼ技能以外の内容で作成しており、改めて技能について考えるよい機会になりました。最近の指導要領をきちんと見たことがないので、チェックしようと思います。

毎年貴重な勉強会を開催して頂き、心より感謝申し上げます。体育の授業の意義や成績評価について、先生方の有難い情報共有を頂き、ヒントを得ることができました。

この度は貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。取り止めもなく感じたことをお伝えします。

今回のセミナーを通じて、ルーブリック評価の基本から学ぶことができました。「教えた内容が身についているかを評価する」ことは、一見当然と思われる評価方法です。しかし、実際に体育の授業に適用しようとすると、常に変わる状況の中で評価すべき動作を選び出し、信頼性の高い定性的な評価を行うことは非常に難しいと感じましたが、その一方で教育者としては、この問題に立ち向かうべきだという思いも強く感じました。そこで、完全な解決策ではなく、折衷案を探す必要があると考えています。

その一つの案として、私は「評価対象の動作を容易に選び出せる IT システム」の導入を考えていました。AI カメラを用いて授業中の動画を撮影し、授業後に評価対象の動作が映る箇所を素早く特定し、その前後の動作に基づいて評価することで、ルーブリック評価を現場に適用できるのではないかと思います。これは AI との共存の良い例になる可能性がありますが、とはいえ、実際の現場への導入は容易ではないとも感じています。

理想と現実の間で、様々なアイディアを出し合い、理想に少しでも近づけるよう、現場で努力する必要があると感じました。この機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

「ルーブリック」といってもいろいろなレベルのルーブリックがあるかと思います。例えば、以下のような種類が存在します：

科目群全体の到達度を評価するようなルーブリック。

１つの科目全体に対して、学生の到達度を評価するルーブリック。

科目の中のある課題（レポート課題や実技課題）などを評価するルーブリック（いわゆる「課題ルーブリック」）。

科目の中で、ある能力の１側面を、全授業回を通じて評価するルーブリック（今回のワークショップで作ったようなルーブリック）。

これらの異なるレベルのルーブリックを区別して議論する必要があると感じました。特に、ルーブリックに関してあまり共通認識ができていない場合に、よく起きる認識の違いかと思います。参加

者それぞれがどのレベルのルーブリックを想定しているか、違う場合があるため、それを理解することが重要だと感じています。
　このワークショップでは、これら複数レベルのルーブリックについて十分に触れられていなかった点が気になりました。各レベルのルーブリックの適用範囲や特徴についての詳細な議論や事例の共有があれば、より深い理解を得ることができたと思います。今後の研修等では、これらの点にもっと焦点を当てて欲しいと感じています。
――

▶ディスカッションおける話題提供、また、ルーブリックの活用を含めた大学体育の充実について、ご意見、ご感想などがあればご記入ください。

　複数教員間での評価の差をなくすための試みは、とても大事ですし、学生と評価項目を共有し、透明性のある採点を実施するのも、大切な試みと思いました。取り組みの結果報告などあれば、是非勉強したいと思いました。
――
　大学体育には専門教育と教養教育の側面があり，それぞれ何を教えて，何を評価するべきか，という議論から始まる必要があると思いました．それによって評価方法としてはどのようなものを選定するべきかなどが変わってくると思います．また，専門教育と教養教育の教員が一緒にディスカッションをすると，そもそも目指すものが異なるので消化不良を起こす先生方も多かったのではないかと思います．
――
　技能的なものは段階に分けやすいと感じルーブリックも作りやすいかと思った反面、評価しにくい内容について指標の作成方法についてもっと知りたかった。
――
　なかなか事例数は多くないと思われるが，ルーブリックを導入し（てみ）た授業の実態（うまくいったことも難しいことも全て含め）をお聞きできる会があれば参加してみたい。
――
　ルーブリック自体は継続して考えなければならないと痛感しております。一過性のシンポジウムではなく、定期的に開催して継続する必要があると考えます。ただ誰かにその負担が集中してしまうことは避けられませんが。
――
　大変学びの多い機会となりました。ルーブリックやチェックリストの活用含め、検討をしていきたいと思います。
――
　今回の内容の研修会を継続していくことも必要と感じました。
――
　実技でのルーブリック活用は実際には難しいところがあると思うが，もう少し簡易的なもので，評価ができるようになるとよい感じる．
――
　体育の授業実践例や他分野におけるルーブリック実践例など、実際に使用しているものを見せていただくことができて、とても参考になりました。重要性は認識されていても活用事例が少ないこともわかり、引き続き、試行錯誤しなければならないと感じました。

今回、体育以外の実習科目のルーブリック評価も勉強になりました。このように他の実習系の先生のお話を聴けるのも有難いです。

今後の大学体育を考える上で、体育を単なる教育の「方法」として捉えるのか、あるいは体育という概念自体を教えるものとして捉えるのかによって、アプローチが異なると思います。また、教員の属性によって、教えられるべき内容や担当すべき科目が異なるという問題が存在しているように感じます。教員の属性は大きく分けて３つあります：

スポーツ科学等の研究を主に行ってきた体育教員：これらの教員は、理論的な側面に強みを持っています。

アスリートとしての高い競技能力、またはコーチとしての高い指導力を有している体育教員：彼らは実践的なスキルに長けています。

上記の両方を備えている体育教員：このタイプの教員は現実ではそれほど多くはないため、多くは上記のいずれかに分類されることが多いと思われます。

例えば、スポーツ科学を主に研究してきた教員が、学生に対して人間性の部分を教えるような授業を行うのは無理があると思われます。同様に、競技中心で経験を積んだ教員がスポーツの科学的な側面を教える授業を担当するのは適さない場合があります。

こうした、様々なタイプの教員が混在するため、全国の大学体育教員の意見を集約しても、それぞれの認識の違いが大きすぎて、一致した見解に至るのは困難だと思います。例えば、大体連や慶應体育研究所などの推進力のある一部のグループが「これが今後の大学体育授業のスタンダード」というものを、有無を言わさず作ってしまう方が効果的かもしれません。

大学教育全体を考慮すると、数理・データサイエンスなど新たに教えるべき科目が増え続けており、現在の体育授業がそれらの科目に割って入るのはかなり厳しい状況にあると思います。そのため、体育授業の内容を積極的に、そして根本的に変革し、今後の大学教育全体に必要な科目（内容）としての価値を打ち出すことが求められていると思います。

体育はいまのところ生成 AI の発展の影響をあまり受けていない科目のように思います（言語系などはかなり影響を受けています)。そのあたりに今後の体育の価値のヒントがあるようにも思います。

慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催ワークショップ
後援：慶應義塾大学教養研究センター

ルーブリック活用のための ワークショップ＆ディスカッション

【日時】2023年12月2日（土）14:00~18:00

【会場】慶應義塾大学日吉キャンパス スポーツ棟
およびZoomを併用したハイブリット開催

参加無料
【要】事前申し込み

【プログラム】
体育実技を中心にルーブリック評価表の作成を学び、ディスカッションでは実験実習系の授業などの事例も加え、成績評価の在り方、ルーブリックの活用を考えます。

第一部　ワークショップ　14:00~16:00
『実技・実習系授業のルーブリック作成の実際』
講師　佐藤　豊（桐蔭横浜大学スポーツ科学部）

第二部　パネルディスカッション　16:10-18:00
『ルーブリックを活用した実技・実習系授業の充実を考える』

●パネラー（話題提供）

1．**高等教育における学修評価のあり方**
佐藤　豊（桐蔭横浜大学スポーツ科学部）

2．**授業実践例・教員アンケート報告**
永田直也（慶應義塾大学体育研究所）

3．**成績評価の実際についての話題提供**
金田晃一（千葉工業大学先進工学部）

4．**自然科学系分野におけるルーブリック実践例**
久保田真理（慶應義塾大学医学部）

●司会進行　村山光義（慶應義塾大学体育研究所）

申し込みはこちらから
以下のURLまたはQRコードからお申し込みください。
https://forms.gle/9j8rYYqWsiHE9ZzP7

参加申し込み

【問い合わせ】慶應義塾大学体育研究所　担当：東原綾子
Tel：045-566-1068（代表）　E-mail：higashihara@keio.jp

2023 年度
慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書
2023 年 12 月 27 日発行
編集・発行 慶應義塾大学体育研究所
基盤研究３班
班長　村山光義，　班員　佐々木玲子，　奥山靜代，　永田直也，　福士徳文，
稲見崇孝，　東原綾子，　清水花菜，　寺岡英晋（日本体育大学）

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1
TEL.045-563-1111（代表）
http://www.hc.keio.ac.jp/ipe/
ⓒ2023 Keio University Institute of Physical Education
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。